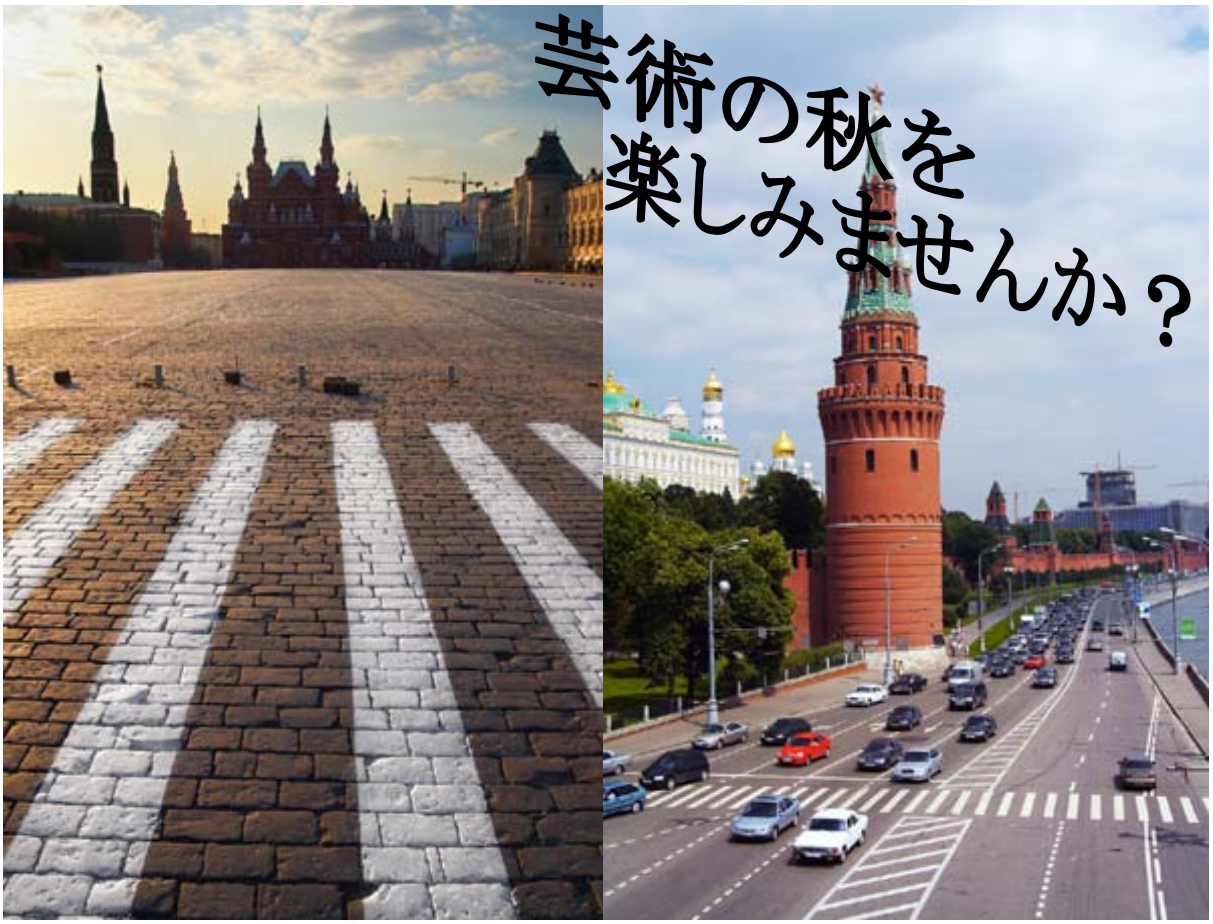
JIC インフォメーション

第 152 号 2008 年 9 月 10 日
年 6 回 1･2･4･6･9･11 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所：JIC 国際親善交流センター　発行責任者：伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス：〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL：03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪オフィス：〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-1-22 フェアステージ大手前ビル 5F TEL：06-6944-2315　jicosaka@jic-web.co.jp

ロシア・旧ソ連　国際交流誌



＜モスクワの赤の広場とクレムリン＞

追悼　チンギス・アイトマートフ
「この世で一番美しいものは愛だ」
追悼文として　江口 満、阿部 昇吉、藤沼 貴・・2-5P
「ロシア人とともに歩く四国霊場八十八ヶ所巡・・・6-8P
「ウクライナ訪問記　後編」永冨　文彦・・・・・・8-9P
書評『メドベージェフ』徳永　晴美・・・・・・・・10-11P
「私たちの心を届けて 17 年間の活動は終わった」・・・12P
ロシア情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13P
ペンパル情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14P
ＪＩＣ情報・予定・・・・・・・・・・・・・・・・・15-16P

- - JICインフォメーションの電子化について - -

日頃は JIC インフォメーションをご愛読いただきありがとうございます。今後は冊子版インフォメーションに加え、電子版インフォメーションの発行を進めたいと考えています。具体的にはメールアドレスをご連絡いただければ、PDF 形式でダウンロードできるように毎号発行時に案内メールをお送りいたします。

ご希望の方は、E-mail アドレス「jictokyo@jic-web.co.jp」にご連絡ください。件名を「インフォメーション」とし、①お名前、②ご住所、③お電話番号、④メールアドレス に電子版インフォメーション希望の旨を書き添えてお送りください。よろしくお願いいたします。

Jクラブ（JIC友の会）会員を募集しています。

追悼　チンギス・アイトマートフ
この世で一番美しいものは愛だ

2007 年秋、チンギス・アイトマートフ氏は雑誌のインタビューで、かつて自身が主宰した“イシク=クリ・フォーラム”について、世界各国から著名な作家が集まったと水を向けられると「(そのメンバーの) 多くは亡くなっているが」と答えている。それから半年余。2008 年 6 月 10 日、偉大な作家であり後年は外交官としても活躍していたアイトマートフ氏は、盟友たちを追って行くようにこの世を去った(享年 79 歳)。氏の作品はその多くがさまざまな言語に翻訳され、世界中で読まれている。日本ではペレストロイカ期の作家としてよく知られてきたが、アイトマートフ氏は、その時代を生きたというばかりでなく、時代の変化を自ら作り上げてきた当事者の一人でもあると言えるだろう。ソ連崩壊後も、キルギス共和国(クルグズスタン)大使として異国の地に住みながら文筆活動を続け、忘却、距離、因習等々による文化の断絶状態を超越するものの存在を世界中に訴え続けた。

JIC インフォメーションでは、アイトマートフ氏をよく知る日本人の一人であろう江口満さんと『いとしのタパリョーク』『キルギスの雪豹』などでアイトマートフ作品の日本語訳を手掛けられている阿部昇吉さんに追悼のメッセージを寄せていただいた。　(JIC 東京　曽根　直子)

アイトマートフ, チンギス・T.(1928.12.12－2008.06.10)
キルギスの小村シェケルで生まれる。
学生時代から文筆活動を開始。キルギス農業大学卒業後畜産技師となるが、文学者へ進路変更する。58年に発表した中篇「ジャミリャ」を含む作品集『山と草原の物語』でレーニン賞を受賞(63年)。キルギス語-ロシア語のバイリンガル作家として、民族、宗教、エコロジー等の問題を問い直す多くの作品を生み出す。
後年は作家としての活動を続けながら、在ルクセンブルクソ連/ロシア大使、在ベルギーキルギス共和国大使、NATO、UNESCOキルギス代表を歴任。

◇日本語に翻訳されている主な著作◇
『一世紀より長い一日』飯田規和訳　講談社　1984
『処刑台』佐藤祥子訳　群像社　1988 (現代のロシア文学)
『チンギス・ハンの白い雲』飯田規和・亀山郁夫訳　潮出版社　1991
『カッサンドラの烙印』飯田規和訳　潮出版社　1996
『この星でいちばん美しい愛の物語』浅見昇吾訳　花風社　1999
『いとしのタパリョーク』阿部昇吉訳　凰書房　2000
『涙が星に変わるとき』浅見昇吾訳　花風社　2002
『キルギスの雪豹』阿部昇吉訳　潮出版社　2008

アイトマートフ氏逝去によせて

江口　満(創価大学准教授)

1988 年、アイトマートフ氏初来日の際に、私は随行通訳をして以来、氏に接する様々な機会に恵まれた。氏を思うとき、浮かんでくるキーワードは「心」である。何を見ても聞いても、うわべではなく、ひとつひとつのものに心を傾注して言葉を発する人だった。日本の演歌を好み、「エンカ、エンカ」といって、哀調のメロディーをくちずさみながら、聞いていた。

父親がスターリンの粛清に遭い、「人民の敵」のレッテルを貼られて、十歳そこそこで、一家をささえる責任を負わされ、戦争で男たちのいなくなった村で、戦死公報を配達し、貧しい各家庭を回って、税金を徴収しなければならなかったと静かに語る氏の姿が目に焼きついている。

そんな氏の発する言葉は人間のぬくもりがあった。子供のような無垢な心と、賢者の心眼を兼ね備えた人だった。

新作『キルギスの雪豹　永遠の花嫁』の邦訳出版を今か今かと、待ちきれない様子だった。自身でそれを手に取るまでの時間が残されていないことをまるで感じていたかのように。

ユーラシア大陸の真ん中、中央アジアに息づく「心の宝」をアイトマートフ氏は私に分けてくれた。

一粒の麦 地に落ちて

阿部　昇吉(翻訳家)

波乱の人生、作品

革命を賛美する文学者たちの声が悲鳴に変わり始めた頃、チンギス・アイトマートフはこの世に生を受けた。五カ年計画の最初の年である 1928 年、スターリンの権力は最高潮に達し、56 年の党大会で批判されるまで、暗黒の時代が続くことになる。1930 年代、粛清で命を落とした犠牲者の数はおよそ1260 万人。アイトマートフの父親もその一人だった。密告がもとで(もちろん事実無根の罪状で)秘密警察に逮捕される。実は、すぐに銃殺され、遺体は遺棄されていたのだ。そして悲しいことに、遺骨が発見されるのに半世紀以上もかかっている(このあたりの事情は対談集『大いなる魂の詩』に詳しい)。幼くして大黒柱を失った一家の生計を支えたのは、他ならないアイトマートフ少年だった。この厳しい現実が、彼の文学スタイルの骨格を形成したのだと思う。いわば人生のスタートから、彼は荒唐無稽な絵空事と

は無縁だった。

彼がロシアの文壇に事実上のデビューを果たしたのは 57 年、フルシチョフのスターリン批判の翌年だった。『セイデの嘆き』は検閲のせいで、原稿の四割近くを削除され、都合の良い形に仕上げられる。スターリンの亡霊は健在だったのだ。脱走兵になった夫をかくまい続けた妻が、夫の人間性の喪失に耐えかね、やがて官憲に告発するというこの作品のプロットに、当局が〈密告〉の正当性を都合よく見いだしたのか。あるいは〈告発〉と〈密告〉の皮相的な類似性を恣意的に嗅ぎつけ、プロパガンダの好材料としてこの作品が利用されたとすれば、作者は我慢ならなかったに違いない。だから翌年に『ジャミリャ』を発表し（これはフランスの詩人に「世界一美しい愛の物語」と絶賛される）、61 年には『いとしのタパリョーク』を書き、恋愛三部作を世に問うことになる。

政治の世界へ

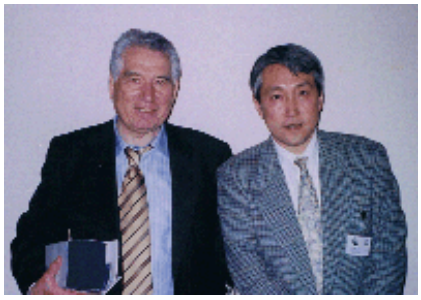
検閲の頸木は、スターリン亡き後も続く。80 年に代表作『一世紀よりも長い一日』が発表されるが、これも一章が丸ごと削除されてしまう。独裁が引き起こす悲劇を見事に描き出したこの章が、『チンギスハンの白い雲』という名の単行本として復活するためには、ペレストロイカの到来を待たねばならなかった。

そのペレストロイカの時代、ベロフやラスプーチンなど、そうそうたる文学者たちが使命感からか政治の世界に身を投じ、やがて去っていく。そんな中、アイトマートフはゴルバチョフのブレーンを勤め続けた。目指すは言論の自由。ペレストロイカの功罪はおくとして、事実上ピョートル大帝の時代から続く検閲制度を廃止したという一点だけでも、評価に値するのではないか。ソ連崩壊を経て、その後のキルギス独立の渦中で、初代キルギス大統領就任の要請を固辞してまで、長くヨーロッパに身をおいた作者は何を思い、何を考えたのか。『キルギスの雪豹』にその答えがあるはずだ。

ペテルブルグでのプレゼンでは、2 時間で 3 千部が完売したという。また 2007 年のキルギスの首都ビシュケクで、書店売り上げの年間第 1 位にも輝いている。批評家たちのシニカルな批評をよそに、なぜ読者はここまで支持するのか？人々は 10 年以上も新作を待っていたのだ。それは、「今や時代錯誤にも聞こえる言葉」（週刊読書人 7 月 25 日号）かもしれないが、それなしには生きていけない「ヒューマニズム」という語の本義が、彼の作品に確かに息づいているからだ。

パリの思い出

当時、氏の通訳をしていた江口満さんの紹介で、私が作家に初めて会ったのが 1998 年。そのときに拙論を手渡したのが縁で、氏の生誕 70 周年を記念するシンポジウムに参加すべくパリのユネスコ本部を訪れたのが、翌 99 年の 3 月だった。その日は、ちょうど内戦の続くコソボに NATO 軍が空爆を開始した日とあって、会場は緊張感に包まれていた。私も拙いロシア語で報告し、氏の奥さんが、遠路はるばる日本から参加したことに心から感謝してくれたのには胸を熱くした。夜、終了後の打ち上げパーティでは、氏の従兄弟が作ったという馬肉サラミに舌鼓を打ち、ウオッカとフランスワインで喉を潤し、ユネスコ本部が閉まる寸前まで楽しい時を過ごした。残っていたフィルムの最後の1枚で氏との記念撮影を終えて地下鉄に乗ったときには、9時を過ぎていた。



＜99 年 3 月　パリにて＞

まる 12 時間というロングランのシンポジウムを終え、静かなメトロのワゴンの中で、私はほっと一息ついた。子供の教育を考えて（再婚した氏には十代の娘と息子がいた）、ルクセンブルグに居を構えるアイトマートフ夫妻。あれほど故郷の自然を愛し、人々から慕われる彼が、老齢の身で異国の地に暮らすその胸の内は、どんなであろうか―そんなセンチメンタルな思いが心をよぎった。

不意に車内に耳慣れた旋律が流れてきた。シャンソンの代表作『枯葉』を、乗り合わせた辻音楽師がクラリネットで演奏し始めたのである。しばし私は心地よい音楽に身を任せた。が、やがて私は耳を疑った。「リンゴの花ほころび…」なんと、ロシア民謡の『カチューシャ』のメロディーが流れてきたのだ。スターリン時代に、多くのロシア人がこの地に亡命した事実が記憶によみがえった…。

クラリネットの透明な音色が、上質のワインのように全身に染み渡ってくる。そう、愛する人々と、美味い酒、そして好きな歌があれば、どこでも生きていけるじゃないか…。私は一人うなずいた。

悲劇の彼方に

出会いから十年、『キルギスの雪豹　永遠の花嫁』が日本で出版される運びとなった。ページ数からすれば中篇に位置づけられる作品だが、「その内容は一大長編に劣らないほど濃い」（月刊「潮」八月号）のだ。初来日の際に通訳の労をとった埼玉大学の佐々木照央先生の言を借りるなら、「世界一の作家」の遺作である。

氏の作品に描かれる人間はその多くが運命に翻弄される。個人のレベルから、やがて民族、国家のレベルに至るまで、これでもかと言わんばかりに宿命の嵐が吹き荒れる。では人は運命に翻弄され、ただ流され続けていく存在なのか。国家や社会という巨大な権力を前にして、限りなく人は無力だ。（現に多くの主人公がそうだ）。けれども彼らは単に打ちひしがれているだけではない。彼らを厳しい運命の渦中に投げ

出しながら、同時に作者は読者にも切実な行為の選択を迫る。我々はこの切実な設問の前で、途方にくれてしまう。安易な正解などないからである。だが前に進まなければならない。どんな選択をしようとも（たとえそれが間違っていたとしても）人生は続く。そう、自身の選択した行為の責任を負いながら、生きていかねばならないのだ。

人間を不幸に陥れるものとの戦い、ひいては民族の悲劇をも転換するための闘争に生涯を懸けた人――唐突かもしれないが、それがチンギス・アイトマートフなのではないか。

母の詩（うた）

氏の訃報が届いた 6 月 10 日、奇しくも母が緊急入院した。病名は肺の大動脈瘤破裂。10 日間の短い闘病生活の後、81 歳の母は眠るように逝った。頑固な人間だったが、いつも人として〈誇り〉を胸に湛えていたように思う。告別のとき、私はふと、アイトマートフの描いた女性たちを思い出していた。どんなに貧しくとも、どんなに辛くとも、運命に翻弄されながらも、人生をひたむきに生きる主人公たち。きっと母もそうだったに違いない…。出版が延び延びになり、あれほど楽しみにしていた訳本を氏に手渡せなかったのが、今となっては心残りである。が、向こうの世界で、きっと母が本の完成を報告してくれているに違いない――私はそう思った。

JIC スタッフの中にもアイトマートフ・ファンがいました。一読者として瑞々しい感動を受けた JIC スタッフの声もここにご紹介し、アイトマートフ氏に届けたいと思います。

＊　　＊　　＊

十数年前『一世紀より長い一日』を読み、私はチンギス・アイトマートフさんのファンになりました。これを読もうと思ったのは、本の題名に惹かれたからです。そんな理由で読み始めたので、まさかこれほど感銘をうけるとは全く期待していませんでしたし、十数年後の私にとって最も愛する作品の一つとなっているとは予想もしていませんでした。『一世紀より長い一日』は確か続けて 3 回読み返したと思います。読んでいる時、私は遥かに続く草原と、風と、砂ぼこり、自然の驚異、そしてそこに生きる人々の愛を生々しく感じていました。まさに私を夢中にさせてしまったのです。その後は『チンギス・ハンの白い雲』『キルギスの青い空』『この星でいちばん美しい愛の物語』を読みました。『一世紀より長い一日』の次に『チンギス・ハンの白い雲』を読んだのですが、その頃には私の中で未だ見たこともない、アイトマートフさんの体も心もダイナミックな人間像が出来上がっていました。その後、ロシア留学中、何度か彼がテレビに出演しているのを目にしました。その時私は本当にロシア語を勉強していてよかった！と感激したのを覚えています。

私が目にした本物の彼は私の想像していたとおり、いやそれ以上に魅力的な人でした。彼自身が、大自然のような人、愛の人です。昨年、JIC のイベント「文学カフェ」でお世話になった阿部先生から、アイトマートフさんは“この世で一番美しいものは愛“だとおっしゃっていたと伺いました。それを聞いた時、私はあらためて素晴らしい作家、作品に出会えたことに感謝しました。運命の本に出会えた！ という程の衝撃を受けてから、実はもうずいぶん長いこと彼の作品を読み返していません。これをきっかけに無性にまた昔に読んだ彼の本を読みたくなりました。彼の愛にあふれる作品がもっともっとたくさんの人に出会えますよう心から願います。

アイトマートフ氏のご冥福を心よりお祈りいたします。

（JIC 東京　藤枝　康子）

●JICロシアセミナー2008●

人的交流を通して見た日本とロシア

講師：渡邉雅司 先生（東京外国語大学教授）

日時：11 月 15 日（土）13：30－17：00
会場：住友不動産新宿オークタワー1 階会議室 Room1
最寄駅：「新宿」（JR 線ほか）西口より徒歩 9 分
「西新宿」（丸ノ内線）2 番出口より徒歩 3 分
参加費：1,000 円（当日受付にてお支払いください）
お申込：JIC 国際親善交流センターまで E-mail、FAX、お電話にてお申込ください。お申込の際には、①お名前②電話番号、E-mail アドレス③ご職業（学校名または会社名）④留学・講座に関する個別相談をご希望の方はその旨　をお知らせください。E-mail でのお申込の際には件名を「JIC ロシアセミナー参加希望」としてお送り下さい。
お申込期限：11 月 13 日（木）　ただし定員になり次第締め切ります。
お申込先 E-mai：jictokyo@jic-web.co.jp Fax:03-3355-7290 Tel:03-3355-7294

ロシア雑貨めぐりの旅！

ロシア雑貨ファンの！
ロシア雑貨ファンによる！
ロシア雑貨ファンのための！
ツアーがついに登場！！

人気のロシア生地やティーカップ、その他様々なロシア雑貨のお店を巡り巡る４日間！
チェブラーシカ、マトリョーシカだけではないロシア雑貨の魅力が楽しめますよ。
詳細はＪＩＣのHP にて。
http://www.jic-web.co.jp

『キルギスの雪豹（ゆきひょう）　永遠の花嫁』

チンギス・アイトマートフ著
阿部　昇吉訳（潮出版社）

絶望の淵に立たされたとき、人はどう行動するのか？圧倒的な富と力によって、一縷の望みさえも奪われた主人公アルセン。宿敵を抹殺すべく武器を調達しに故郷へ戻った彼だったが、雄大な天山の自然と乙女の愛に癒される。しかし背後には、旧友の企てた恐るべき陰謀が息を潜めていた。待ち受けているのは、果たして生か死か…。

本書の邦訳の出版と前後するように、作者の訃報が届いた。その死を悼んで、キルギスでは国葬が営まれたという。残念ながら本作が遺稿となってしまったが、アイトマートフの魂が読者の心に永遠に生き続けるのは間違いない。

阿部　昇吉（ロシア文学研究家・翻訳家）

（東京新聞　2008 年 7 月 3 日夕刊「翻訳掘り出し物」より転載）

書籍プレゼントのお知らせ

今回ご紹介いたしましたチンギス・アイトマートフ著、阿部昇吉訳『キルギスの雪豹　永遠の花嫁』を合計 9 名の読者の皆様にプレゼントいたします。ご希望の方は①お名前、②ご住所、③お電話番号、④メールアドレス（あれば）に書籍プレゼント希望の旨を書き添えて、お葉書、FAX、E-mail のいずれかにてご応募ください。E-mail の場合は、件名を「書籍プレゼント希望」としてください。

第 1 回締切：10 月 31 日（金）　3 名様
第 2 回締切：12 月 26 日（金）　3 名様
第 3 回締切：　1 月 30 日（金）　3 名様

＜応募先＞国際親善交流センター（JIC）　東京オフィス
〒160-0004　東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F
FAX：03-3355-7290　E-mail：jictokyo@jic-web.co.jp

当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

この作品の作者チンギス・アイトマートフ氏は去る六月十日に亡くなった。半世紀以上にわたり『処刑台』、その他の名作を書いた世界的作家。ユーラシアの再生に尽した政治家、外交官、日本文化・東洋哲学の理解者。池田先生の親友の一人だった。

二年前に発表、今年六月に邦訳されたこの作品を読み返すと、鋭敏な作家はすでに死を予感し、若い世代と後世への遺書として、この力作を世に出したことに気づく。「誰にも運命は予知できない―これは常に、万人に当てはまる不変の事実である」この箴言のような重く厳しい言葉でこの作品ははじまる。その後は名ストーリー・テラーの語り口で、テンポよく話が進むが、その内容は一大長編に劣らないほど濃い。

主人公であるジャーナリストのアルセンは自分の真実を追い求め、妻に去られ、ソ連崩壊後金儲けに狂乱する時流に逆らい、愛を歌う歌劇「永遠の花嫁」上演を夢見る。歌劇からポピュラーに転向してスターとなった恋人に捨てられるが、偶然会ったエレスに理想の伴侶を見出し、永遠の愛を誓う。

だが、大自然と野獣を死滅させる狩猟ビジネスが母国キルギスに侵入し、さらにそれが狩猟客を人質にして大金を奪う凶悪犯罪に発展する。アルセンはその一味に巻き込まれるが、最後の瞬間に客を救おうとして射殺される。アルセンは平凡誠実な市民として描かれているが、実は現代の汚濁と退廃に抵抗するヒーローだったのだ。

彼の死後、第一次世界大戦を描いた短編小説『殺せ、殺すな……』が遺稿として発見された。それが付録として巻末に掲載され、大戦の悲劇と現代の惨状が連動する。

アルセンが死んだ時、傍らに老いた雪豹ジャーバルスの死体が横たわっていた。老豹は若い雄に群を追われ、放浪しているうちに狩猟の犠牲になったのだ。しかし、いずれにせよ死は老いた野獣の運命であり、それは無限の生につながる。作者は老豹の運命を自分に重ね合わせていたのだ。訳者が原題『山崩れる時』を『キルギスの雪豹』と邦訳したのは、その意味だろうか。　　**藤沼　貴（創価大学特任教授）**

（潮出版社・月刊「潮」2008 年 8 月号より転載）

ロシア人とともに歩く四国霊場八十八ケ所巡り

－1番・霊山寺から12番・焼山寺まで－

さぁ、出発！

南無大師遍照金剛

「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、…」。別に信心深いわけではないが、「誰でもいいから助けて！」という思いが思わず口をついて出る。第 11 番霊場・藤井寺から 12 番・焼山寺に至る俗に「遍路ころがし」と呼ばれる険しい山道を登りながら、日ごろの不摂生を嘆きつつ、必死の思いで体を持ち上げる。十段上っては体を休めて息を整え、再び上っては荒い息をつく。若いモロゾフ君と林君はもうとっくに焼山寺に着いた頃だろうか。朝 6 時過ぎに登りはじめて、途中何回も休憩を挟みつつ、全長 13.5 キロ、標高 200m から 700m の急なアップダウンを繰り返す山道を何とか歩き通す。

若者たちに遅れること 1 時間以上、モスクワの取引先のリュドミラ社長とともに、ようやく午後 2 時過ぎに焼山寺に到着。本堂と大師堂に線香を供え、般若心経を唱えて、ようやく3日間の「修行の旅」は終わりを迎えた。

＊「南無大師遍照金剛」とは、四国霊場巡りのお遍路さんが歩きながら唱える念仏。「お大師様(弘法大師)の教えは永久不滅であまねく人々を導き給う」といった意味。

歩くことにこそ意義がある！

事の始まりは昨年 8 月の阿波踊りだった。リュドミラ社長は、毎年、日本を訪れてはロシア人好みの日本ツアー開拓に余念が無い。私たちにとっては一番熱心でかつ一番厳しい取引相手であり、同時に一番心を許した友人でもある。昨年は、東北夏祭りと徳島の阿波踊りを視察したのだが、阿波踊りの前に訪れた鳴門市で何気なく紹介した四国八十八ヶ所霊場めぐりがいたく気に入り、「今年は、四国の霊場を一緒に回ってみたい」という提案が春先から飛び込んできた。「まあ、八十八ヶ所を歩いて回るのは無理だから、3､4 日車で回ってみるか」と適当なプログラムを作って提案してみたら、「いやいや、歩くことにこそ意義がある！」とぐうたらな日本人ビックリの過激な返答。リュドミラさんは、ロシア正教の教会が催すウォーキングツアー(150km)にわざわざ参加して準備してくる念の入れよう。リュドミラさんとともに来日した友人のアンドレイ氏（スイス在住、旅行社経営）は 50 歳過ぎにも関わらずトレッキング大好きという本格派。二人の熱意に押されて、JIC からも 3 名がエントリー。真夏の炎天下、7 月 21 日から 23 日まで四国霊場を歩く羽目になった次第である。

ほんまにアホとちゃうやろか？

1日目午前 7 時、一番霊場・霊山寺(りょうぜんじ)で、まずは遍路用品（白衣、菅笠、金剛杖など）を買い揃え、本堂、大師堂にお参りしたあと、さっそく納経帳に一番霊場・霊山寺と墨書、朱印を押してもらう。いよいよ遍路の始まりだ。今日は 1 番から 7 番・十楽寺まで 17.5km を歩く予定。「遍路地図」を頼りに、照り返しのきついアスファルト道をできるだけ避けて、農道や木陰のある旧道を縫って歩く。気温はとっくに 30 度を超えている。汗がダラダラと頬を伝う。用意したお茶やスポーツ飲料がどんどん無くなる。自動販売機を見つけるたびに誰かが水分補給に駆け寄る。「歩き遍路」はわれわれだけか、前も後も歩く人は見当たらない。霊場に着くたびに、車やバスで巡る団体さんとは遭遇するものの、歩いているお遍路さんには全然出会わない（よく考えれば歩く方角が同じなのだから、出会わなくても不思議はないのだが）。こんな暑い時期に歩くのは、「ほんまにアホとちゃうやろか」と不安になりつつ、しかし、もうやめられない。「同行二人」(どうぎょうににん)と書いた菅笠をかぶり、背中に「南無大師遍照金剛」の文字を背負って、ひたすら炎天下を歩き続ける。

田んぼの畦道もある遍路道

＊「同行二人」とは、「お大師様が修行された道をお大師様と一緒に歩く。いつもお大師様が見守って下さっている」という遍路の考えを表現したもの。

四国遍路に「旅行の原型」を見る

四国霊場めぐりはいつごろから始まったのか？　四国八十八ヶ所は弘仁六年(815 年)弘法大師によって開創されたと伝えられている。大師入定(835 年)後ほどなく大師信仰が起こり、平安末期から鎌倉時代にかけて真言宗の修行僧が大師ゆかりの地を巡拝するようになった。室町期に入ると一般庶民も参加するようになり、八十八ヶ所の霊場が固定したのは室町末期から江戸初期の頃と言われている。江戸時代の初期に、高野山の僧・真念が四国の縁起や八十八ヶ所の道程をまとめた『四国遍礼霊場記』を著し、また簡便な「遍路指南」(ガイドブック)も作られて四国遍路が一般化していった。全道程 1440 ㎞、歩けば 40 日から 60 日もかかる長旅だが、各地の宿坊や民家に宿をかり、時には野宿して巡る遍路の旅が、「お伊勢参り」などとともに、人々の楽しみと癒しの場となっていった。はるばる四国まで足を伸ばせない人のために各地に「ミニ八十八ヶ所」も作られた。霊場巡りは、日常生活を離れて心と体をリフレッシュする、いわば「旅行

の原型」なのだ。

今では四国霊場めぐりも「商業化」の波に洗われ、各寺々に立派な宿坊が建ち、周辺には遍路専用の宿が整えられている。1日目に宿泊した十楽寺の宿坊は最近新築されたばかりで冷暖房完備、立派な食堂ではおいしい夕食と各種の「般若湯」(酒、ビールなど)が供され、並の旅館やビジネスホテルよりよほど豪華だった。ネットで検索すれば、効率よく各霊場を巡るバスツアーや観光タクシーの宣伝が目白押し、遍路用品の販売サイトも花盛りだ。誰が考えたか、各寺ごとに納経帳や白衣、掛軸などに墨書、朱印を押してもらうスタンプラリー方式がすごい。いやでも八十八ヶ所を全部回りきろうという気にさせる工夫がしっかりなされている。

歩いていると見えてくるものもある

忙しい現代の日本人。時間がかかる歩き遍路を選択する人はよほど少ない。しかし、実際に歩いてみると、車で走り抜けるだけでは見えないものが見えてくる。

2 日目は午前 6 時前に出発。暑い夏は早朝から歩いて夕方早目に休むに限る。まずは十楽寺の境内でおにぎりの朝食を手早くとってから歩き始める。今日は 7 番・十楽寺から 11 番・藤井寺まで約 20km の道のりだ。途中、北の讃岐山脈の麓から広い田園地帯を横切り、吉野川を越えて四国山地の麓へと分け入る。初日は物珍しさも手伝って、またお寺とお寺の間隔が短いので、皆元気で饒舌だった。しかし、2 日目は霊場の間隔がずっと長い。太陽が高くなるにつれ、皆無口になっていく。気温は今日も 35 度近くまであがりそうだ。黙々と歩いていると、やりかけの仕事や会社のこと、今年の春に逝った父のこと、就職浪人中の娘のこと、…等々、様々な雑念が頭を駆けめぐる。駆けめぐるが頭の中は何もまとまらない。とにかく暑い。しんどい。日陰が恋しい。そのうち歩くことだけが自己目的化してくる。何も考えずにひたすら歩くようになる。一体自分は何のために歩いているのか、…。再び「ほんまにアホとちゃうやろか？」という思いが苦笑とともに浮かんでくる。同時に、心を無にしてひたすら歩くことに何らかの精神浄化作用があるのかもしれないと思ったりもする。

第 8 番　熊谷寺の山門

それにしても「ロシア人にとって、こんな遍路旅が本当に面白いのかねぇ？」という疑念も浮かぶ。リュドミラさんもアンドレイ氏も遍路の参拝手順を生真面目に守って、霊場に着くたびに手水場で手を清め、納札を納め、灯明と線香、賽銭を上げ、念珠を持って合掌して回る。意味はわからなくても般若心経の読経にじっと耳を傾けている。ロシア正教もキリスト教なので一神教であるには違いないのだが、一方、ロシア人の宗教観に潜む「大地信仰」のようなものが日本の八百万(やおよろず)の神の汎神論的気分に通じるのかもしれない。それにロシア人は意外と迷信深い。「橋の下でお大師様が休んでいるかもしれないから、橋の上では杖をつかない」という四国遍路の言い伝えを信じて真面目に実行している。

＊「橋の上では杖をつかない」。弘法大師がかつて修行中に宿が見つからず厳寒の一夜を橋の下で過ごしたという故事による。

＊　＊　＊

こうして3日間の夏の「修行」は過ぎていった。2日目からは何人かの歩き遍路さんとも巡り会う。われわれ以外にも歩いてる人がいるのだと一安心。自転車をこいで巡拝する若者もいる。焼山寺に向かう山道で追い越していった大学生の男性は、この夏休み1ヶ月間をかけて歩く予定という。同じく全道程歩くというオーストラリア人の女学生にも遭遇する。それぞれが、心に何かを持って歩いている。最初は冷やかし半分だった遍路の旅も、3日間とはいえ歩き通してみると、さわやかな達成感があり、また続きを歩いてみたいなという気になるから不思議だ。「歩くことに意義がある」というリュドミラさんの指摘はやはり真理を突いていたと思う。

当初はお互いに「この四国霊場めぐりは、とてもロシア人観光客向けプログラムにはなるまい」と、商品化抜きにあくまで趣味として楽しんだつもりだったのだが、リュドミラ社長がモスクワに帰って、旅の模様を会社のスタッフたちに話したところ、「それは面白い！ロシア人客にも十分うけるのではないか」という声が上がり、今後、「四国霊場めぐりツアー」がロシアの旅行マーケットに現れる可能性も出てきた。それはそれで面白いし、もし実現すれば素晴らしいとは思うのだが、「では誰がガイドするんでしょう(誰が一緒に歩くのか？)」というのが、目下のところわが JIC スタッフを悩ませている問題ではある。　(JIC 東京　伏田　昌義)

皆さん、この夏いかがお過ごしでしたか。夏休みを海・山・海外などで過ごされた方が多いかと思いますが、リフレッシュできましたでしょうか。

それに比べて JIC 外国人旅行部の不思議な「夏休み」は今年も健在でした。精神的にも体力的にも日々弛んでいる社員の根性を鍛え直すべく、弊社のロシア取引パートナーである VARVARKA TRAVEL の社長・リュドミーラさん(女性です)が弊社の社長、部長の林、そして小生を引率して四国霊場 88 ヶ所の巡拝を強行いたしました(笑)。しかも、それは皆さんが想像されるようなお気楽な車での旅ではなく、歩き旅でした。正に「修業」としか言い様がありません。もちろん、88 ヶ所をすべて歩いて回ろうとしたら、それはそれは1ヶ月以上の月日を要しますのでサラリーマンの私たちには無理な話です。そこでリュドミーラさんが考えた策とは、いわゆる「区切り打ち」というもの。ご存知の方もいらっしゃると思

いますが、四国 88 ヶ所巡りには①第１札所から順番に回っていく「順打ち」、②第 88 札所から逆順番で回っていく「逆打ち」、③そして仕事で忙殺されている現代人には「時間がある時少しずつ回っていく」方法、すなわち「区切り打ち」が存在します。今年のタイム・リミットは 3 日間。目標は1番から 12 番までを制覇する事でした。

アスファルト道をただ、ただ、歩く

皆さんが気持ちのいい海水浴や涼しげな避暑地で夏休みを楽しまれている間、我らの小団は 35 度を超える猛暑の中、白装飾に笠というお約束の格好で朝 5 時から夕方の 5 時まで、毎日ひたすら歩いておりました。そして不思議な事に、途中までは只々「しんどい」と心の中で叫んでいた私たちは、いつしかこの不可解な行為を楽しむようになり、気がつくと日々のストレスや悩みが自然と消えていくという現象に驚きを覚えました。勘違いしないでほしいのですが、私は決して自虐行為を楽しめるド M な性格ではありません。しかし、歩くにつれ心も体も軽くなっていく。こんな体験をされた方はいらっしゃいますか。「3 日だけじゃ足りない！」なんて、旅の最後の夜には全員口を揃えて言っていました。

そんな訳で、来年も白いビーチを見ることなく、今度は 5 日間を割いてこの旅の続きを「楽しむ会」に参加いたします。「楽しむ会」は第 88 番札所までの残りの距離を考えると、この先 10 年ぐらい続く会になりそうです。「東海道中膝栗毛」で描かれているほどのものではないのですが、色んなことが起こりましたし、これからもきっとたくさんの面白いエピソードを皆さんに披露できると思います。来年の報告、楽しみにしてください！　（JIC 東京　モロゾフ・デニス）

ウクライナ訪問記 -後編-

JIC 大阪　永冨　文彦

シンフェローポリ行きの寝台列車に乗り込んだのは 18 時。18 時と言っても外はまだまだ明るい。この時期の日没は大体 21～22 時のため、しばらくは通路に立ち、窓を開けて「世界の車窓から」気分。テーマ曲が頭の中に流れてくる。キエフを出発して 1 時間もしないうちに、車窓は見渡す限り草原（畑）地帯になり、ウクライナは歴史的にも大穀倉地帯として有名だったことを思い出した。そういえば、最近『日本の農業の未来はウクライナにかかっている』という話を聞いたことがある。なんでも、青森のある農家がウクライナに 350 ヘクタールの土地を借り「大豆」の栽培を始めたそうだ。最近流行りのバイオ燃料のせいで高騰が続く大豆を、この肥沃な黒土地帯で安く栽培し、かつ品質まで改良し日本に逆輸入しようということらしい。まさに一石二鳥（三鳥？）。目の前に広がる大平原を見ながら、この光景が日本の農業の希望になるとは、と意外なところでウクライナと日本のつながりを再認識し、そして自分もそこにいることを不思議に感じながら、日没をむかえた。

◆4 日目　ヤルタ着

朝、シンフェローポリに到着後、今度は車で約 2 時間、ヤルタへ。到着時の天気はシンフェローポリでは大雨だったにも関わらず、少しずつ、黒海が視界に見え出すと、天気も気分も晴れ晴れとしてきた。

ヤルタには日本語の専門ガイドがいない。現地の専属ガイドが同乗し、そのガイドのロシア語を、さらにキエフから同行してきた日本語ガイドが訳して皆に説明するという「ダブルガイド」スタイルで、街の説明が始まる。『ヤルタの人口は約 10 万人。そのうち 6 割がロシア人、3 割がウクライナ人、残りがその他の民族となります。ヤルタの街の語源は「岸辺」という名のとおり、黒海と自然に囲まれた保養地として、古くから貴族や皇帝たちに愛され、今でも毎年夏にはリゾート地として国内外から多くの観光客が訪れます。』と話を聞いていると、道はちょうど海岸に沿うようになり、左手には陽光に輝く黒海が目に入る。その光景にすっかり仕事であることを忘れてしまいそうだ。

さて、本日のホテルに到着。ここは 05 年にできた「クリミンリヴィエラ」という 4 つ星ホテルで、世界的にも有名な「ラディソン SAS グループ」系列のホテルだ。中庭から黒海を臨む最高の立地を誇り、ホテル内部もヨーロッパ風の落ち着いた雰囲気と重厚な造りが安心感を与えてくれる。到着時にはウェルカムドリンクのサービスもあり、ホテルスタッフも愛想がよく、リゾート地としての経験・自信をその笑顔に感じることができた。今回はウクライナの各種ホテル事情を見ることも使命のひとつだったが、結論から言って、キエフを含め好印象のホテルが多い。サービス感覚（笑顔）やホテル内施設・設備の充実については予想以上のところが多かった。4 つ星、5 つ星のホテルはそれなりに当たり前だが、3 つ星のホテルでもカードキーは当然で、だいたいどこのホテルにも WIFI(無線インターネット)の設備を備えている。またホテルオリジナルのサウナやサービスなどもあり、なかなか良い印象だ。しかし、中には、やはり「旧ソ連系」のサービス・無愛想さを感じる面もまだまだあるのは残念だった。そういう意味では、クリ

ミア半島に入ると、キエフよりもホテルとしてのサービス・質の高さを感じることが多かったように思う。

◆5 日目　ヤルタ

今日からはいよいよ観光だ。まずはヤルタ市内から 20 分ほどの距離にある「アループカ宮殿」を見学する。

ここは 19 世紀この一帯を統治していたヴォロンツォフ伯爵の宮殿で、現在はその調度品などを展示する博物館となっている。ヴォロンツォフ宮殿にいくまでは、散歩がてら敷地内の公園を歩いていく。ゆっくりと歩いて 30 分以上はたっぷりかかる広さの公園だったが、快晴に恵まれ、緑に囲まれれば何も不満はない。途中、学校の社会科見学？といったような子供たちの団体がいたり、この地方独自のハーブティーを売っているお店があったり、突然目の前に孔雀使い（孔雀と記念写真が有料でとれますよ、という商売人）が現れたりと、飽きさせないまま気づけば宮殿に到着していた。内部の展示品については“百聞は一見に如かず”ということで割愛。ちょうど裏門から入り、博物館の中を通り、表の庭へ出ると、そこは見渡す限りの黒海。表の庭にはカラフルな花や植物がきれいに整備され、その黒海の美しさをさらに引き立てている。もちろん記念撮影をして、しばし余韻を楽しんだ。

次はヤルタ市内の中心地、メインストリートのレーニン海岸通りへ。なぜか、未だにレーニン像が堂々と立っているレーニン広場を抜けると、活気のある並木道が続く。人々はTシャツ姿や水着でゆっくりとくつろぎ、子どもたちはローラースケートやラジコンでわいわい、すぐ側のビーチでは日向ぼっこをする人達、そして耳には大道芸人の声や民族音楽が聞こえてくる。楽しさを全部詰め込んだようなその光景に、仕事で来たことを再び悔やんだ。

さて、せっかくだからちょっとお買い物をしましょうか、ということでお土産散策開始。そういえば「ウクライナのお土産」と言われてピンと来るものがない。お土産屋さんや空港の免税店などをみても、マトリョーシュカ、チョコレート、琥珀など「ロシアのお土産」と 99%かぶってしまう。しかし！クリミアには名産品がある。それはワインだ。ロシアにはオリジナルワインはほとんどなく輸入ものばかりだが、クリミアには世界に誇るクリミアワインがある。その中でもトップメーカーのワイナリーが「マサンドラ」。国際コンクールで 4 回「スーパーグランプリ」＆「グランプリ」、また 190 の金・銀賞を受賞している名実ともにトップクラスのワイナリーである。マサンドラのワインは、「有害な化学的物質を一切使用せず、天然素材のみの使用を基本原理とする古典的製法でつくられた、生態学的に極自然なワイン」だそうだ。某ガイドブックでは、「マサンドラ」の白マスカットワインが名物と書かれているが、ヨーロッパで数々の賞を受賞したワインは主に甘いデザートワインで、値段はピンきりだが、1 ボトル日本円で 1,000 円～9,000 円くらい、と高くはない。この地中海性気候のクリミア、黒海と自然に囲まれた大地で育った葡萄たちはさぞかし「素直」な子だろうと思い、いくつか日本に連れ帰ることにした。

◆6 日目＆7 日目　ヤルタ～バフチサライ

「ヤルタを含むクリミア半島は、リゾート地としてももちろん有名ですが、歴史的な面でも重要な面を数々もっています。その中で最たるものの一つが・・・」と、ガイドの説明を聞きながら「そう、これを見ずには帰れない」と内心呟いた。リヴァーディア宮殿である。

言うまでもなくあの歴史的首脳会談、「ヤルタ会談」の舞台となった宮殿だ。ルーズベルト（米）、チャーチル（英）、スターリン（ソ）が第 2 次世界大戦の戦後処理について話し合った当時の円卓・椅子がそのままに残る歴史的に重厚な空間。宮殿内には、その宮殿専用の現地ガイドが登場し、当時の様子を再現して話してくれる。「この左の入り口からチャーチル一行が、こちらのドアからルーズベルト一行が登場し・・・」と説明を聞きながら、壁に展示してあるほんの 60 数年前の写真を目にすると、歴史の現場がより鮮明に浮かび、自分の立っている位置とそれが重なる。「この左の部屋は、ヤルタ協定後にルーズベルトがスターリンとの密約を交わした場所で、日ソ中立条約の一方的破棄、そしてソ連が対日参戦を決めた場所です」と次々に再認識させられるその事実・迫力、まさにその歴史の 1 ページに立っている感覚は、なんとも言葉では表現できない重みを感じる。ぜひとも皆さん自身の五感で感じてもらいたい名所のひとつだった。

と、気づけば紙面残りわずかになってしまった。まだまだヤルタには見逃せない名所がたくさんある。チェーホフが晩年を過ごした「チェーホフの家博物館」や、かつてのオスマントルコの影響を受けたクリミア・ハーン国の宮殿跡がある「バフチサライ」、絶壁に建つかつての豪邸レストラン「ツバメの巣」や、はたまた標高 1200m の山を恐怖の角度で登るアイペトリ山のロープウェイなど、魅力は尽きない。

ロシアに隠れてまだまだ注目度の低いウクライナ。今のうちにぜひとも一度訪れてみてはいかがだろう。　（終）

ユーラシアブックレット No.125

書評『メドベージェフ』
-ロシア第三代大統領の実像-

大野　正美著　　東洋書店

＜評者＞上智大学外国語学部ロシア語学科教授
朝日新聞客員　　徳永　晴美

かれこれ 15 年以上前だが、評者は新生ロシアのモスクワで朝日新聞特派員として働いていた。議会砲撃・解散までもあった当時、常識では考えられないことが日常生活レベルでも次々と起こった。

一例を挙げると、ジャガ芋持ち逃げ事件というのがあった。テレビのニュースで、オランダの資本による効率的な農業が一地方で大々的に始まり、近代的な馬鈴薯栽培が繰り広げられている場面が放映されたのが発端だった。

すると翌日には、このニュース映像を見たジャガ芋泥棒が畑を荒らしてしまった。というわけで、次のテレビニュースでこれを報じたところ、何と、孫を連れた爺さんたちがさらに殺到して、手当たり次第にジャガ芋を掘り起こして持ち去ってしまった。「泥棒は良くありません」と訴えたつもりが、「どこどこではジャガ芋が取り放題の状態である」と、泥棒が可能な場所を公然と教え広めてしまったのだ。

そもそも土地は我々ロシア人のものという、共同体所有の従来の意識と、法秩序を無視して顧みない古来ロシア流の悪気のない奔放・放埒主義ともいうべきメンタリティーの発露である。私的所有権の遵守などという基本的なルールさえ万人には浸透していないロシア。「いっぱいあるのにどうして掘って持ち帰ってはいけないのだ。もともとこの土地は我々の物ではないか」という意識。これを克服せずにロシアに近代市場関係を導入するのは不可能だ。こうした過去のメンタリティーから法治国家への移行を果たすためにはプーチンの唱える「法の独裁」が必要だった。

そのバトンを受けたメドベージェフ大統領もプーチンと同じく法学畑出身で、法遵守を伴う市場経済メカニズムの発展を目指すリベラル派である。今日、世界的な原油高の下、石油大国でもあるロシアには、ほとんど何もせずにオイルマネーが貯まり放題になりつつある。ロシアは「北のサウジアラビア」の道を辿りつつある。国内の科学技術・最新経済メカニズムの発展をおざなりにしても経済が潤うという危険な「オランダ病」の道だ。これからの脱却を目指すのがメドベージェフの戦略的な課題だ。

メドベージェフ氏が第三代ロシア大統領に就任したのは 08 年 5 月だった。そしてプーチン前大統領は、彼の下で首相を務めることになった。「タンデム（二頭立て）政権」と言われるこの状況について、青山学院大学の袴田茂樹氏は、「憲法では一応三権分立を唱えていますが、ロシア人には権力が分割し得るという意識はありません。指導者、皇帝は一人なのです。その一人が全権を握らないとロシアは安定しない。歴史的にも皇帝が二人いたら、一方はニセ皇帝です」と言う（『公研』2008№535，75p.「プーチン・メドベージェフ　二頭政権の行方」）。同氏によると、大統領と強力な首相という二頭政権というのは、ロシアでは非常に恐ろしい、「混乱のシンボル」のような言葉と見なされているのだ。

また、ロシアジャーナリスト同盟オレグ・パンフィーロフ氏（50）はこう比喩する―

「プーチンは単に自分の鏡を磨き直した、そして今メドベージェフの顔を目にしている。が、それは彼自身だ。恐らく全く如何なる変化も生じないだろう」（テレビ朝日 7 月 24 日夜のニュースステーションで放映）。今後もプーチン主流に変わりないと言うわけだ。

しかし、実際の二頭体制の出だしはどうだろうか？

すでに初めてのケースを我々は目撃した。8 月 8 日、北京オリンピックの開会式にはプーチン首相が出席した。時を同じくしてグルジアの内戦に「ロシアの駐グルジア平和維持部隊」が武力で割り込み、その後ロシアとグルジアの軍事衝突に発展した。プーチン首相は、五輪開会式からとんぼ返りし、北オセチアで難民救済などの采配をふるった。

一方、メドベージェフ大統領は、EU 議長国フランスのサルコジ大統領やドイツのメルケル首相らと会談を重ね、停戦合意、ロシア軍の軍事行動停止を発令するなど、堂々たる国家元首の役を演じた。とりあえずタンデムはきちんと役割を分担して見せたと言えよう。

まだ記憶に新しいが、メドベージェフ新大統領の国際的なデビューの場は、7 月初旬の主要 8 カ国（G8）洞爺湖サミットだった。衝撃的だったのは、サミット後の同大統領の記者会見だ。新ロシア大統領のロシア語は、発音明瞭、論旨明快で、よどみない思考の流れがほとばしる。これまで色々なロシア人のスピーチを同時通訳する機会があったが、久しぶりに彼の通訳をしてみたい誘惑に駆られ、浮き浮きするとともに深く感動したものだ。どうかインターネットで聞いてみてほしい。紛れもない雄弁家だ。ユーモアも、遺伝子組み換え食品（генетически модифицированные /генно-модифицированные продукты）などハイテク関連用語もぽんぽんと出てくる。

ところで、彼とプーチンのタンデムの将来を占うタイムリーな本が出た。書評はあちこちで取り上げられているが、この

興味深いテーマに朝日新聞モスクワ支局長ならではの詳細な現地生情報を生かし切り込んだ労作だ。

冒頭で筆者は、大統領選挙で当選を確実にしたメドベージェフ氏が、人気ポップス歌手らのコンサート会場に、焦げ茶の革ジャンパーをはおり、ジーパンをはいたラフな姿で現れる様子を描写する。ロックとジーパンを愛好する 42 歳の全く新世代の指導者の登場だ。読み進めば、大学時代、ソ連時代の体制内予定調和的な革新派、そつなき出世主義者の顔と、市場経済派の学者の顔も持つ、二段構えの風見鶏的な個性を具備した「柔軟な」人格像が浮かび上がる。それが今後、吉と出るのか凶と出るのか？

著者は在モスクワ邦人ジャーナリスト中最古参のロシア・ウォッチャーで、新大統領本人の発言や論文、さらにプーチンをはじめとする周辺の証言を駆使して実像をあぶり出そうと努めている。

そのロシアの政治舞台裏でしばしば暗躍するグループとしてシロビキ（силовики）が挙げられる。これは、元来「軍部、警察、治安情報関係省庁（＝武力省庁）の関係者・出身者」のことである。シーラ（сила「力、武力」）を背景とする者達ということで силовики＝シロビキと呼ばれる。これについては石川一洋 NHK 元モスクワ支局長が月刊『世界』（「復活するロシア　メドベージェフ・プーチン二頭政権の目指すもの」、2008-9-№782）で、クレムリンの勢力図の中でセーチン大統領府副長官を中心人物とする「最大の派閥」「強硬派」が、プーチンの采配下で次第に影響力をそがれて、それに拮抗する形で「リベラル派」のメドベージェフが地歩を固める、という過程を人事異動の分析を通して大胆に描写している。

書評に取り上げた大野氏の著作でも、政権内で、セーチンなど石油利権を握った保守派シロビキとメドベージェフの暗闘を描くくだりが面白い。彼らと比べればメドベージェフは相対的にリベラル派であるという。確かにメドベージェフは 5 月 7 日、大統領就任演説の中でも、最重要課題として「市民的、経済的自由のさらなる発展」を挙げた。

気がかりな、史上例のないプーチン氏との「タンデム」政権については、ロシアに二巨頭体制は馴染まないとして、プーチン院政下で摩擦が生じるか、メドベージェフの独自色が強まるか、興味は尽きない。その答えのヒントを求めて読み込んでみるのもよかろう。

先の『世界』の石川氏の論文は、「米国の住宅投資会社の破綻は続き、金融不安は収まらない。そして原油価格の高騰は続き資源大国ロシアには巨額なマネーが流入する」と指摘。「国際政治と経済の一つの極としてのロシアの復活はもはや避けることはできず新たな現実となろうとしている」と断じている。疑いなくそれは、メドベージェフ・プーチンの二頭体制の間で権力闘争が起きない限り、極めて妥当なシナリオとなり得よう。

JICモスクワ通信Vol. 12

ロシアの病院ってどんな感じ？

実は私、7 月末に突然入院しました。なぜなら、小指に「ひょうそ」が現れて痛みがひどくて寝られず、病院で診察を受けたら、手術を受けるしかないと言われたからです。

入院したのは、モスクワ市立第 6 病院でした。場所はモスクワの中心地でもはずれでもなく、ノーヴァヤ（新しい）・バスマンナヤ通りとスターラヤ（古い）・バスマンナヤ通りの間に位置していました。この二つの通りが交差するところにラズグリャイ広場という広場があります。日本語に訳すと「遊ぼう！」広場となるのですが、なぜこのような名前が付いているかというと、昔ここに「遊ぼう！」という居酒屋があったからだそうです。ちなみに、トルストイの有名な小説「戦争と平和」の中にも一度、この広場のことが書かれています。でも入院するのであって、「遊ぼう！」なんてとんでもない、むしろ入院したら退院まで病院を出られない状態でした。

手術後、医者に「一度でも病院を出たら、完全に治っていなくても病院追放」と言われていたので、治るまでおとなしく 2 週間ほど入院しなければなりませんでした。でも、保険のおかげで、入院しても 1 ルーブルも払わずに済みました。ロシアでもきちんと保険があります。食事は、朝は 9 時・昼は 12 時、夜は 17 時ときっちり決まっており、15 時にケフィール（ヨーグルトのようなもの）とケーキが出てきます。病院の食事はとてもおいしいとは言えないですが、これだけきっちり出てくるので入院中に「お腹がすいた」と思ったことはありません。面会は平日の 17 時～19 時まで、休日の 11 時から 13 時までした。面会のときは、果物やお菓子を持ってお見舞いに来てもらったり、一緒に病院の庭を散歩したりします。日本とあまり変わりないですね。また平日 13 時に患者の家族は医者と話をして、「いつまで入院が必要か」「病状はどんな感じなのか」を聞くことができます。私の病室は 5 人部屋でした。食事時と誰かが面会に来た時以外は暇なので、本を読んだり、お茶を飲んだり、隣の患者と話をしたりして過ごします。

入院するのは初めてで、新しい経験になりましたが、やはり健康で仕事や好きなことをしている方がいいですね。皆さんロシアでも日本でも入院しないよう体に気をつけてお過ごしください。　　（JIC モスクワ　トカチェンコ・ドミトリー）

——日ソ親善協会の事務局次長を長らく務めたあと、ソ連崩壊後のロシア(旧ソ連)で両親がいなくて困っている学生たちに奨学金を届けようと、ボランティア活動を続けてこられた横須賀寿子さんの活動は、本紙でも何回か紹介してきました。このほど 15 年間の活動に区切りをつけ、心のこもった横須賀さんの挨拶を載せた機関紙「地球人」の最終号が送られてきました。横須賀さんがこの活動を立ち上げた直後の 1994 年秋に、タチアナさん（当時、医科大学生）とドミトリー君(当時、音楽大学生)の 2 人の奨学生を日本に招待する手伝いをして、東京と大阪で交流会兼演奏会を開いたことを思い出します。1人でもその気になればこれだけ心の通じ合う交流ができるのだという見本を見せてもらった思いです。「横須賀さん、長い間ご苦労様」の思いを込めて、「地球人」最終号を転載させていただきます。

私たちの心を届けて17年間の活動は終わった

NPO ロシア学生奨学日本基金の機関紙「地球人」第 24 号(最終号)より

長い間ご協力いただいた私たちの奨学支援は、07 年会計年度の今年 3 月で終わりました。この活動を会員として、またいろいろの立場から支えていただいた日本やロシアの多くの皆様に、心から厚い感謝を申し上げます。

私たちの活動は、ソ連体制が崩壊した 1991 年から準備をはじめ、ロシア国際婦人センターのナターシャ・グリゴリエヴァ事務局長（当時）の協力を得て、両親のいない大学生を捜し出し、15 年間で 350 人の学生にささやかながら奨学金を提供し、新しいロシアの社会に送り出すことができました。毎年、学生リストが来ると、ロシアの大きな地図に学生のいる大学の町に友好の灯がともったと、赤い印をつけたものでした（私たちが支援した学生の学校は 34 都市 135 大学に及びます）。

日本基金の運営は会費とカンパで行い、事務局は私宅を使い、事務経費と奨学金、卒業祝い金、モスクワなどの事務補助費を賄い、他はボランティアで運営してきました。奨学金の額は国から出されている額よりも多い額に定め、モスクワに届け、奨学金と領収書の用紙を入れた緑の封筒に入れて、モスクワに来る各地の協力者に渡し、学生に届けてもらいました。だから私たちは、その時期にモスクワに行く信頼できる協力者を探すことが大事でした。会員からの会費が届くのが遅れている時は立て替えたり、持参する人がいない時は責任上、自費で届けたことも何回かありました。

今だから言えるのですが、毎年 6 月になると学生の卒業や大学院進学の様子も分かり、在学生の人数も決まり、次年度に支援できる学生の人数を決めてモスクワに伝え、新しい学生リストを作るために地方に連絡します。この人数を決める時が、来年も会員の皆さんが支えてくださるようにと祈りながら、一年のうちで一番緊張する勝負の一瞬でした。税金や手数料を取られても、学生たちに直接送金すれば簡単ではないかと、日本でもモスクワでも言う人がいましたが、人と人とを繋げていくことも運動の一つだと私たちは考えていたのです。私たちの支援活動は、友好団体や労働組合、企業からの支援は得られなかったけれど、会員の皆様の善意に支えられて、慈善事業ではなく友好と連帯の運動として、卒業生を新しいロシアの社会に送り出すことができたことを、今誇りに思っております。

学生たちの絆を支えてあげられた

93 年、グリゴリエヴァさんと一緒に、ロシアでチェルノブイリ事故の被害を一番大きく受けたブリヤンスクの「子供の家」（孤児院）と大学を訪ねました。子供の家の関係者や村人たちが、大きな家族になって子供たちを温かく見守り育て、社会に出ても困らないように、躾を厳しく身につけさせていることを知りました。その子供の家で育った女子学生のいる教育大学を訪れ、彼女の寮を訪ねました。3 人部屋で窓際に 2 人の学生のベッドがあって、家族からの援助もあるらしく、荷物も多く華やかでした。彼女のベッドは入口の廊下側にあって、殆んど荷物はなくてベッドの下にダンボール箱が 2 つあるだけでした。彼女にとって大学に入ることは一人きりで社会に出ることだったのです。口に出して言えない彼女の孤独と、悲しさを感じました。その時、「日出る国に、自分がどうでもよい存在ではないと思ってくれる人が住んでいることを知った」という奨学生たちの私たちへの感謝の言葉を聞いたのです。グリゴリエヴァさんは学生に誕生日のカードを送ってくれたし、学生たちの機関紙を作って各地にいる同じ運命の家族を繋げてくれました。

日本を知ってもらう活動になった

「原爆の図」を描いた故丸木位里・俊ご夫妻が、私たちのために書いてくださった「地球人」という題字とシンボルマークは、ご夫妻の心を学生たちに伝えることができました。特に「長崎の鐘」を設置したサンクトペテルブルグのサハロフ名称平和公園には、結婚した学生たちが子供をつれて訪ねていますが、2 人の学生が写真を私に送ってくれました。

また、空手クラブのアンケートに、卒業生の子どもが空手を習う理由を問われ「僕のおばぁちゃん（私のことです）は日本人だから」と書いたと、子供の写真を送ってくれました。リャザンの村の教師になった学生は、生徒に日本から奨学金を貰ったことを話し、子供たちはそれを家族や村人たちに伝え、日本を知らなかった村人たちが、日本はお伽噺の国のようだと言っていると知らせてくれました。私たちのささやかな活動が、ロシアの協力者や学生たちによって、遠く離れた私たちと、日本を知らなかったロシアの人たちを繋げてくれたのです。

最後に、発足以来この活動を支えて下さった和田春樹先生、鳩山由紀夫先生、伏見康治先生（2008 年 5 月逝去）をはじめ理事、監事の方々に心から感謝を申し上げます。

ロシアの大地に羽ばたいた私たちの息子や娘たちが、地球人として豊かで平和な人生を過ごせるよう祈りましょう。40 年余りの日ロ友好の最後の活動を皆様と共に取り組めたことを、心から感謝申しあげます。

（代表理事・横須賀寿子　よこすかとしこ）

ロシア情報

サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団
チャイコフスキー・フェスティバル
指揮：テミルカーノフ70歳記念

巨匠テミルカーノフ＆老舗サンクトペテルブルグ・フィル。
ロシア最高のコンビで贈るチャイコフスキー。

◆公演予定◆

11 月 3 日(月・祝)14:00　東京サントリーホール
　　19:00　東京サントリーホール
11 月 4 日(火)19:00　東京サントリーホール
11 月 5 日(水)19:00　東京オペラシティ　コンサートホール
11 月 10 日(月)19:00　東京オペラシティ　コンサートホール

主催：梶本音楽事務所
後援：ロシア連邦大使館
協力：株式会社 BGM JAPAN
　　ユニバーサルミュージック株式会社

◆チケットのお申込み◆

カジモト・イープラス　Tel：0570-06-9960
　　http://kajimotoeplus.com/

青春のロシア・アヴァンギャルド
初公開★モスクワ市近代美術館展

1917 年の革命をはさむ 10 数年間に展開したロシア・アヴァンギャルドは、青春の息吹を感じさせる鮮烈な芸術運動だった。西欧のもっとも新しい美術の動向を取り入れる一方で、民衆版画などロシア土着の素朴な美術がもつ表現にも敏感に反応し、革新的で個性的な作品が次々と生み出された。20 世紀初頭に光芒を放ち、美術史に決定的な刻印を残したロシア・アヴァンギャルドの魅力を存分に味わいたい。

場所：サントリーミュージアム(大阪・天保山)
会期：2008 年 9 月 25 日(木)～11 月 3 日(祝・月)
休館日：会期中無休
開館時間：10:30～19:30(最終入場は 19:00 まで)
入場料：大人 1,000 円
　　高・大学生、60 歳以上　700 円
　　小・中学生　500 円
　　※11 月 3 日(文化の日)は小・中学生無料です。

キエフ・オペラ ～ウクライナ国立歌劇場オペラ～

キエフ・オペラは、ボリショイ、キーロフ(マリインスキー)と並ぶ、旧ソ連邦 3 大国立歌劇場として世界にその名を知られている。同歌劇場のオペラ団が初来日を果たしたのは 2 年前の 2006 年。外来オペラとしては驚異の 60 公演を実施し、約 10 万人を動員。その圧倒的な人気を見せつけた。

3 年連続となる今回の来日公演のうち、今回はオペラ作品の中でも最高傑作のひとつに数えられるヴェルディの「椿姫」と、2 年前のトリノオリンピックで一躍、その名を日本中に轟かせたプッチーニの遺作「トゥーランドット」をご紹介！

◆公演予定◆

10 月 7 日(火)・8 日(水)・9 日(木)18:30 「椿姫」
10 月 10 日(金)・11 日(土)18:30 「トゥーランドット」
10 月 11 日(土)・12 日(日)13:30 「トゥーランドット」
　　全公演、オーチャードホール(東京)にて

◆料金◆

S席　18,000 円

JICインフォメーション読者 特別割引価格　S席　16,000円

◆チケットのお求めは◆

光藍社(こうらんしゃ)
Tel：03-3943-9999　E-mail：ticket@koransha.com
URL：http://www.koransha.com

◇チケットは、お電話または E-mail にてお申し込みください。その際必ず、JIC インフォメーションを見て申し込んだ旨をお伝えください。お伝え頂かなかった場合は、特別割引価格は適用されません。
◇E-mail でお申し込みの場合、ticket@koransha.comまで、次の必要事項をご記入のうえお送りください。
1、お名前(ふりがな)　2、郵便番号・ご住所　3、お電話番号　4、お申込公演名　5、公演日　6、開演時間　7、座席の種類　8、枚数　(割引適用チケットをご希望の方は、JIC インフォメーションをご覧になった旨お書き添えください。

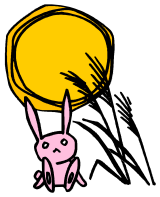
◇注意事項
＊お申込後、お取りした座席番号を記載した振込用紙が送付されます。ご確認のうえ、お近くのコンビニエンスストアにてご送金下さい。＊入金確認後、チケットが送付されます。チケットは配達記録郵便での配送となります。＊チケット代のほかに 400 円(税込)のチケット郵送料がかかります。
＊公演に関するお問合せは、光藍社　(担当：森島)＊チケットの価格は税込価格です。＊プログラム・内容・出演者は予告なく変更になる場合があります。ご了承ください。

ロシア・旧ソ連地域よりペンパル募集です

旧ソ連圏にお友達をつくろう！！

①**Name** ②Sex ③Born(Age) ④Address ⑤E-mail ⑥Occupation,Hobby ⑦Languages

①**Latypov Ivan** ②Male ③1992 ④Ryazan city, Russia ⑤metamorphling@myself.com ⑥anime, listening to music, reading books, computer games. Konnichiva! I want to have a talk with Japanese people, because I'm interested in Japan. ⑦Russian, English



①**Kupko Daria** ②Female ③1982 ④Kiev, Ukraine ⑤ d.kupko@gmail.com ⑥ Japanese literature, Irish dance ⑦ Russian, English

①**Egorova Daria** ②Female ③18y.o. ④ Russia, Moscow ⑤ egorova495@gmail.com ⑥ I'm student and secretary on reception in an automobile company. My hobby: traveling, vocal, listening music, reading, dancing, driving on a bicycle and a car. I wish to find friends in Japan, I will be grad to meet you in Moscow. I will lead excursions on museums and the historical centers. ⑦ Russian, English, Japanese a little.

① **Stolyarova Nastya** ② Female ③ 20y.o. ④ Russia, St.Petersburg ⑤ loveyourlife@mail.ru ⑥ learning foreign languages, Japanese culture, Reiki Usui Shiki Ryoho (wellness technique for a healthy body, mind and spirit), traveling, reading, geology, jazz music, etc. ⑦English, Russian and a little Japanese

①**Shvetsov Igor** ②Male ③1980 ④Russia, Moscow ⑤ weadr@mail.ru ⑥ I work at TV studio, I know English well. I like Japanese culture and music so much. ⑦Russian, English

① **Savchenko Natasha** ② Female ③ 1982 ④ Russia, St.Petersburg ⑤ natashkino@gmail.com ⑥ Movie, reading, Japanese language and culture, anime, Japanese tea, design, fantasy, folk-music, chess ⑦ Russian, a little English and Japanese

① **Ermalyuk Artem** ② Male ③ 1988 ④ Russia, Korchugino ⑤ ruserafimru@mail.ru ⑥ reading, internet games, fantasy, design ⑦Russian, Japanese, English

① **Bivot Tatiana** ② Female ③ 1981 ④ Russia, Vladivostok ⑤olesybil@mail.ru ⑥I'm a designer. I like nature, talking with friends. I have been in Japan once. ⑦Russian, English

①**Startsev Alexey** ②Male ③1976 ④Russia,Voronezh ⑤ alexei@webrain.biz ⑥ Music (I play the piano, guitar), traveling ⑦English, Russian

① **Teterina Tatiana** ② Female ③ 1992 ④ Russia, Cheboksara ⑤fosenok@rambler.ru ⑥I'm a student. I learn English and Japanese. I like dogs, car, traveling. ⑦English, Russian and a little Japanese.

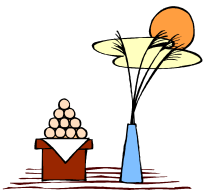
①**Mikhailov Maksim** ②Male ③1986 ④Russia, Moscow ⑤xedvin@mail.ru ⑥Japanese culture and language, anime, nature, animals. ⑦English, Russian, a little Japanese

①**Pozdnyakova Maria** ②Female ③20 y.o. ④Russia, Kemerovo city ⑤ marie-kem1@yandex.ru ⑥ I'm student. Hobbies are theatre and languages. I'm interested in music, languages, Communication with different people, Russian culture, Japanese culture ⑦Russian, English, Franch.

① **Zagorodniy Sergei** ② Male ③ 1969 ④ Russia, Gelenzhik ⑤ seabluz@yandex.ru ⑥ computer ⑦ Russian, English, Japanese

① **Lebedeva Yuria** ② Female ③ 1985 ④ Russia, Kemerovo ⑤lebedevay@gmail.com ⑥picture, music, film, literature ⑦Russian, English, German

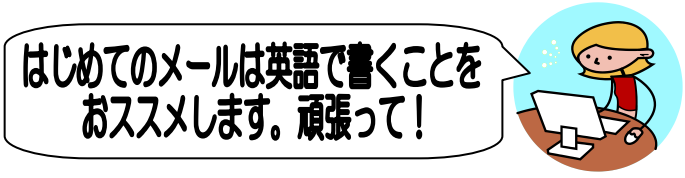
① **Popvanova Natalia** ② Female ③ 1990 ④ Russia, XMAO ⑤ kiddy@nextmail.ru ⑥ miracle, fantasy, camera, music, Japanese culture, design ⑦Russian, a little English & Japanese



①**Sheiko Anton** ②Male ③1975 ④Russia, Moscow ⑤ paleopa@mail.ru ⑥ traveling, programming, camera, history, art, car ⑦Russian, English

① **Samarai Olga** ② Female ③ 1986 ④ Russia, Volgograd ⑤ Sam1710@rambler.ru ⑥ music, film, anime, reading, Japanese Culture ⑦ Russian, English

① **Melen Alla** ② Female ③ 1967 ④ Russia, St.Petersburg ⑤ stayonline@mail.ru ⑥ nature, traveling, art, literature, Culture of many countries, music, world news



ＪＩＣロシア語講座　後期が始まります！

10月開講！

秋の夜長にロシア語はいかがですか？？？

東京

10 月 14 日（火）より随時開講！！

教室：国際親善交流センター（JIC）会議室
＜東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目」徒歩 3 分または「四ツ谷」徒歩 10 分＞
東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7 階

受講料：後期　全 18 回　54,000 円（2 講座受講割引あり・分納制度あり）
お問合せ：JIC 東京オフィス Tel：03-3355-7287 E-mail：jictokyo@jic-web.co.jp

入門（火曜日 19:00-20:30） 初心者の方を対象にアルファベットから 1 年かけてロシア語文法の基礎を勉強します。4 月開講の通年コースです。

初級（月曜日 19:00-20:30） ロシア語のやさしい読み物を少しずつ読みながらロシア語に慣れ、ロシア語での会話にも慣れていくクラスです。

中級（水曜日 19:00-20:30） 文法の教科書を用い、身近な出来事などを題材にロシア語の表現力を高めていきます。

文学講読（木曜日 19:00-20:30） 小説を中心に読んでいきます。文学作品はロシア語表現の宝庫、楽しみながら語学力をアップさせましょう。学習歴 3 年程度以上のロシア語力の方対象。

時事会話（金曜日 19:00-20:30） 新聞、ニュース、物語などを読みながら語彙力を高め、文法も確認します。積極的に会話し、総合的なロシア語力を高めることが目標です。

使える会話①（土曜日 10:45-12:15） ビデオを用いて、モスクワやペテルブルグの街を巡りながら街歩きでよく使うロシア語を勉強しましょう。上級の方対象。

使える会話②（土曜日 12:30-14:00） ①と同内容。初級～中級の方対象。

大阪

10 月 17 日（金）より随時開講！！

教室：国際親善交流センター（JIC）会議室＜地下鉄谷町線「天満橋」下車徒歩 3 分＞
大阪市中央区谷町 2-1-22 フェアステージ大手前ビル 5 階

受講料：後期　全 15 回　35,000 円（学割・2 講座受講割引あり）
お問合せ：JIC 大阪オフィス Tel：06-6944-2315 E-mail：jicosaka@jic-web.co.jp

入門（火曜日 19:00-20:30） 4 月にアルファベットからスタートしたクラスの続きです。独学ではアルファベットでつまづいてしまう方もぜひチャレンジしませんか？

初級（木曜日 19:00-20:30） 文法を学びながら、単語だけではなく文章での会話にチャレンジしましょう。会話にも徐々に慣れていきます。

中級（金曜日 19:00-20:30） 文法が身に付いたら会話のバリエーションを増やしていきましょう。ロシア語が使えるようになったら、ますます面白くなっていきます。

上級（月曜日 19:00-20:30） 文法・語彙力・会話力のある方にお勧めのクラスです。自分の意見をロシア語で表現できるよう訓練しましょう。ディスカッションも取り入れています。

日本語講座

ロシア語で教える日本語講座　後期　**Курсы Японского Языка.**
10 月 3 日（金）より授業スタート！！　**Преподавание на русском языке!**

◆с 3 октября(пт) по 19Декабря(пт). Общее количество занятий -22. (каждый вторник и пятница)
◆Курсы：вводный, начальный, продвинутый
◆Стоимость обучения：66,000иен
◆Время проведения занятий：12:30-14:00 вводный курс
14:30-16:00 продвинутый курс
16:30-18:00 начальный курс
◆Место проведения：160-0004, Tokyo, Shinjuku-ku, Yotsuya, 2-14-8, YPC bldg., 7th flr.

По всем вопросам обращайтесь к нам!
JAPAN INTERNATIONAL CENTER
for Friendship and Exchange (JIC)
Tel: 03-3355-7287　Fax: 03-3355-7290
E-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

9～11月の予定

10月　3日(金)JIC 日本語講座　後期スタート！
10月14日(火)JIC 東京ロシア語講座　後期スタート！
10月17日(金)JIC 大阪ロシア語講座　後期スタート！
11月15日(土)JIC 東京　ロシアセミナー
最新情報は JIC のホームページに
随時掲載いたします。ご確認下さい！

JICは頑張る人を応援します！

旧ソ連関係のイベント案内掲載をご希望の方は JIC までご相談ください。イベント時期の約 2 ヶ月前に情報をお送りください。JIC インフォメーションの発行は、１・２・４・６・９・１１月の６回となります。
掲載内容が JIC の活動に合わない場合はお断りする場合もありますのでご了承ください。

◇◆編集後記◆◇

9月に入りました。早いですね。8月の終わりごろからだんだんと涼しくなり、過ごしやすくなってきた半面、今年は特に荒れた天気も多かったように思います。各地で河川氾濫や土砂災害が起こりました。

9月は長雨の時季と言われます。外にお出かけしたくないお天気でも秋の楽しみはたくさんありますよね。読書の秋・芸術の秋・スポーツの秋・食欲の秋などなど。私としては、今夏はあまり趣味の山登りを満喫できなかったので、もう少し夏山を楽しみたいところではありますが。。。なんて言っているうちに山も紅葉の季節を迎えそうです。

皆さんもそれぞれの秋を見つけて、長雨の時季を楽しんでくださいね。あ、でも、食欲の秋を楽しみすぎると大変なことになるかも。。。お気をつけて！

（JIC 大阪　小西章子）

＊＊JICのロシア語研修＊＊

ロシア長期留学4月生・募集中

予価です！

【期間】2009年4月より 10 ヶ月
【締切】2009年1月30日
モスクワ国立大学＄３８７０（授業料 10 ヶ月）
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ 国立大学€ ２８８０(授業料 10 ヶ月)
ウラジオストク極東大学＄３０４０(授業料 10 ヶ月)
＊上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び取得手数料などがかかります。

ロシア語個人研修（随時募集）

☆モスクワ・ダリパス社　1 週間～4 週間　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 3 食付）
☆モスクワ大学　3 週間～長期（大学寮 1 人部屋）
☆G＆R インターナショナル 1 週間～長期
（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付/大学寮 2 人部屋）
☆ペテルブルグ・パートナー社　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付）
☆ペテルブルグ大学　1 ヶ月～長期
（大学寮 1 人部屋/2 人部屋）
☆ウラジオストク極東大学 1 週間～長期　（大学寮 1 人部屋）
☆ウラジオストク極東大学　1 週間～1 ヶ月　（ﾎｰﾑｽﾃｲ 2 食付）
☆ビジット生活体験コース（ﾎｰﾑｽﾃｲ 3 食付）

ロシア語グループ&個人研修（随時募集）

リデン＆デンツ　スイスの会社出資のロシア語学校。
個人・グループレッスン。モスクワとペテルブルグにあり、インターナショナルな雰囲気。初心者より上級者まで。２週間より可能。基本はホームステイ２食付。詳細はパンフレットをご覧下さい。

デルジャーヴィン・インスティテュート
全ロシアプーシキン博物館の協力により設立された学校で、18 世紀の建物内で授業が行われます。アットホームな雰囲気でお勧めです。グループレッスン、１週間より可能。基本はホームステイ２食付。詳細はパンフレットをご覧下さい。

◆ロシア留学旅行相談（東京･大阪各ｵﾌｨｽ）◆
ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。お気軽にお越しください。

東京事務所　平日 10-18時　土曜 10-16 時
大阪事務所　平日 10-18時　土曜（6-9 月のみ）10-16 時

留学・研修各種パンフレットは JIC へご請求ください。留学・旅行相談お気軽に！

～Jクラブ（JIC友の会）のご案内～

ＪＩＣインフォメーションを年６回、またＪＩＣのイベント案内をもれなくお届けします。
ご希望の方には入会案内をお送りいたしますので、ご連絡ください。会費は無料です。
国際親善交流センター